

いが、RI検査により診断の端をつかみ得た症例として報告した。

14. 骨髓炎における骨シンチグラフィーについて

高橋 弘

(いわき共立病院・放)

田畑 四郎 木田 浩

佐藤 哲郎

(同・整外)

急性ならびに慢性骨髓炎で、骨シンチグラムが病態把握の一助になりうるか否かについて検討した。検討の対象は急性骨髓炎1例、慢性骨髓炎12例であった。これらの症例に、 ^{99m}Tc -diphosphate 10~15mCiを静注し、注入後3~4時間後に撮影したが、Follow up studyも含め20回のScanningを行なった。Scintigram撮影時の症状の有無により治癒、非治癒の2群に分け、これら2群と病巣部のRIの集積型を均一分布、不均一分布に分けた2群とで対比した。治癒例(7例)としたものに均一分布を示すものが多く、非治癒例(6例)としたものに不均一分布を示すものが多かった。さらに不均一分布を示し、術後臨床経過の良好な慢性骨髓炎の3例、また急性骨髓炎の1例も症状が消失した後、均一分布に近い経過を示すことから、治癒過程を推測できる有用な方法と考えられた。また手術により、腐骨または膿瘍が確かめられた5例の内、1例に術前cold lesionが認められ、この部は腐骨部に一致していた。Davidは悪性腫瘍で、X線写真上2cm以上の骨融解像が認められ、周囲にvascularityが低い場合にはcold lesionとして描出されると述べているところから、慢性骨髓炎では、cold lesionの存在は腐骨または膿瘍の形成が疑われるものと思われる。症例が少ないこともあり今後さらに検討したいと考えている。

15. リアマット T_3 および T_4 キットの基礎的ならびに臨床的研究

原 正雄 富永 真琴

山谷 恵一 八幡 芳和

(山形大・三内)

リアマット T_3 およびリアマット T_4 キットを用い、血中サイロキシンおよびトリヨードサイロニンの測定を行なった。2検体ずつ同一アッセイ内で多重測定を行なった結果、 T_3 キットの変異係数4.1%, 6.0%であり、 T_4 キットでは3.4%, 8.6%であった。正常値、異常高値および異常低値を示す血清について、異なるアッセイで検討した結果でも良好な再現性が得られた。未知検体に各種濃度の標準溶液を等量加えて行なった回収テストではほぼ完全な回収率が得られた。4検体について、8倍まで倍数希釈を行なった希釈テストでも、両者とも希釈直線は直線的であった。 T_3 と T_4 の交叉反応はみられなかった。

リアマット T_3 の正常値は $97 \pm 20 \mu\text{g/dl}$ 、甲状腺機能正常の甲状腺疾患以外の患者、いわゆる Sick Euthyroid では $119 \pm 40 \mu\text{g/dl}$ 、リアマット T_4 では健常人 $7.2 \pm 1.3 \mu\text{g/dl}$ 、sick Euthyroid $6.0 \pm 1.4 \mu\text{g/dl}$ であった。バセドウ病、亜急性甲状腺炎の一部、妊娠の一部が高値を示し、甲状腺機能低下症、慢性甲状腺炎の一部で低値がみられた。

リアマット T_4 と CPBA 法によるサイロキシン値の相関は相関係数 0.80 で相関を示したが、われわれの CPBA での正常値 $8.9 \pm 2.8 \mu\text{g/dl}$ にくらべ低値を示した。サイロキシンについては測定キットにより、その正常値が異なるので相互の比較には注意を要しよう。

16. P.E.G. 法による血清 T_3 の測定

海瀬 信子 海瀬 和郎

山本 蒔子 斎藤慎太郎

(東北大・二内)

従来血清トリヨードサイロニン(T_3)の測定には二抗体法、デキストラン炭末法(D.C.C.法)等が用いられて来たが、最近ポリエチレングリコール